

# 造船協會雜纂附錄

## 時報

第 1 號 昭和 21 年 7 月刊行

### 目 次

時報發刊の主旨	會長 井口常雄
第 49 期年度春季講演會の狀況	
技術委員會の解散と新研究委員會の發足	
船舶工學便覽刊行その後の狀況	
役員會決議事項摘錄	
第 49 期年度通常總會議事摘錄	

### 雜 錄

4 月以後の諸會合 編輯連絡員に就て 事務室より	雜纂第 267, 268 號記事預告 會費納入に就きお願ひ
--------------------------------	----------------------------------

### 時報發刊の主旨

會長 井口常雄

本協會では従前から其の機關雜誌として會報と雜纂とを發行してをることは御承知の通りであります。が、戰爭末期以來印刷能力の壊滅に因り遂に自然休刊の形に陥り今日に至つたことは洵に遺憾とする處であります。終戦後約1年を經過し、その間印刷能力も漸次復活して參つたとは申しますものゝ、戦前に比較しますとまだまだ微弱でありまして、殊に本協會發行のものゝやうに數式や圖版の多いものは容易に引受手もない有様であります。協會では有らゆる手段を盡して會報雜纂の再發行に努力中でありまして、幸ひ近く雜纂第267號を會員諸君の御手元にお届け出来る筈でありますし、續いて會報第

73號の印刷に着手する豫定であります。然し乍ら上述の印刷能力の他に、用紙の配給量がこれ亦極めて貧弱でありまして、只今の有様では大體 100 頁程度の會報を年 2 回、30 頁前後の雜纂を年 6 回位漸く發行し得るといふ状態であり、而もこれすら定期的にキチンキチンと發行することは中々困難と思はれます。

そこで種々考慮しました結果、印刷し易く又用紙も餘り使用しないで而も本協會の活動狀況、講演や寄稿の梗概その他協會に關する諸般の事柄を簡単に要領よく且迅速に會員諸君にお知らせする方法として、大體毎月1回數頁のものゝを發行することにしようといふことで、從來

雑誌の終りに載せた時報欄を分離して雑誌の附録の形でこの時報を發刊することにした次第であります。即ち本協會の事業とか或は講演乃至寄稿等の詳細は會報及び雑誌本誌によつて御承知願ふこととし、この時報では簡單ではあるが會の動きを成るべく早く會員諸君にお知らせするといふのが狙ひであります。従つて印刷能力が戦前の状態に戻り又用紙の配給も増加して會報は年2回雑誌は毎月必ず定期的に發行し得るやうになればこの分離した時報は當然雑誌本誌中の一部に復歸せしむべきものと思ひます。つまり斯様な時代の到來するまでの便法と言つたやうな意味のものであります。

どうかこの邊の事情を充分御了解になつて、當分の間會報及び雑誌の他にこの時報によつて協會の全貌を察知されんことを希望します。

### 第 49 期年度春季講演會の狀況

5月5日の日曜日に19年11月以來1年半ぶりで本年度春季講演會が東大第一工學部第3號館第31號講義室で催された。午前9時10分開始の井口會長の開會の辭から午後7時20分終了の山縣主事の閉會の辭まで食時間も僅か30分、午後の休憩時間も抜きにして約9時間に亘り13氏の研究發表及びこれに対する熱心な討論が行はれた。久し振りの講演會であつたため、來會者も總計約280名に達し、中々盛會であつた。詳細は何れ會報で發表される筈であるが、各講演の内容の概略を述べると次の通りである。

#### 1. 浅水及び制限水路に於ける造波抵抗特に其の不連続性に就て

准員 工學士 乾 崇夫君

著者が昭和19年11月の講演會で發表した浅水時の一般造波抵抗式を用ひて、水深のみ有限で水幅に制限の無い無限に擴つた浅水を航行する任意物體の造波抵抗が、孤立波速度に於て抵抗値そのものは連続であるが速度に対する一次微分商が不連続となることを示し、次に水深のみならず水幅にも制限が加はると孤立波速度に於て造波抵抗値そのものが不連続となること

を理論的に導いた論文である。尙著者はこれを實驗的結果と比較して兩者がよく一致することを示した。

#### 2. 船體抵抗に對する制限水路影響に就て

正員 工學士 木下昌雄君

著者は先づ船舶が河川運河等の如き制限水路を航行する際の船の前後及び舷側に於ける流水の狀況、就中相對流速及び水面變化量に關して理論的に考察し、その結果を浅底水槽に於ける模型船に依る實驗成績と比較してその考察の正當なることを確めた。次に、以上で明かになつた流水状態を基礎として制限水路を航行する船舶の全抵抗を算定する方法を考察し、全抵抗を摩擦抵抗、造波抵抗、造浪抵抗、堰返し波に基く抵抗、修正項の5つに分類して夫々に對する算定法を案出した。而して模型實驗の結果を解析して所要の實驗係数を定め、任意船型の船が任意の截面を有する制限水路を任意速度で航行する際の全抵抗を算出し得る方法を考察した。

著者は從來から浅水效果に就き屢々本協會で論文を發表してゐるが、今回は更に完全な理論的及び實驗的結果を導き、且その實際的應用に迄研究の歩を伸した、全く本問題に關して類のない論文を公表したものである。

#### 3. 船舶推進問題に於ける二三の簡便法

正員 工學士 谷口 中君

著者は本論文に於て、推進器直徑、抵抗速力馬力推進器等の微小變化間の關係、速力の僅かな變化に對應する馬力の變化の問題に對して簡便解法を述べてゐる。推進器直徑に就ては特別の設計圖表を使用することなく、簡単な渦の理論と實際の資料の解析とによつて1軸當りの主機の馬力、毎分回轉數及び船の速力ののみを知つて直徑の大略を決める方法を述べ、抵抗、速力、馬力、推進器等の微小變化間の關係に就ては定常航走状態に對する船舶推進の方程式の一次微分間の關係を求めることによつて解決し、最後に速力の僅かな變化に對應する馬力の變化は、

有効馬力を表はす方程式を微分して第2項を省略して近似的に簡単な式でこれを示してゐる。これに依ると速力の1節の變化に對應する馬力の變化の割合は10節附近では3%、15節附近に於ては2%の程度となり、これ迄の経験とよく一致すると述べてゐる。船の初期設計の馬力推定に就て一解決法を與へたものと言ひ得る。

#### 4. 鐵系推進器の電氣的防蝕法

正員 工學博士 奥田克己君  
田川信夫君

電氣的防蝕法には外部から電流を供給する方法と、電氣化學的に卑なる金屬を接続して電池を形成せしめる方法との2種ある中、本論文はその前者による鐵系推進器の電氣的防蝕法の基礎を數量的に明確ならしむるため、海水中に於ける軟鋼の電氣的性質を究明し、これを基礎として先づ實驗室に於ける實驗に成功し、次に2噸木造船動機に就て約1年、430噸鋼船に就て約6個月間實驗を行つた結果何れも殆んど腐蝕の形跡なく、充分信頼に値することを確めた。

#### 5. 電氣的防蝕法の數學的考察

酒井彦四郎君

著者は(i)金屬の腐蝕量は金屬から液に流出する電流に比例する、(ii)金屬表面に生ずる分極電壓は電流密度に比例する、(iii)液の比抵抗は到る所一様である、(iv)同一金屬物體内では到る所電位一定である、といふ4つの基礎假定の下に、分類電壓のない場合とある場合との基本式を作り、その各の應用例を示してゐる。即ち今迄實驗式に依つて求めてゐたことを數學的に解いてゐる。

#### 6. 平面構造物の振動に就て

准員 工學士 山本善之君

著者は本論文に於て、直線部材より成る平面構造物の振動を嚴密且一般的に論じ、その振動數方程式を求め、振動型を調べる方法を述べてゐる。普通振動方程式は行列式で與へられるが、この計算は非常に困難なのでその次數を可及的減ずる方法として著者は變位迴轉角曲げモ

メント剪斷力を適當に取ると一端につき2個宛減らし得るといふごとを利用して相當複雑な構造物を可なり簡単に解き得ることを考案した。これにより矩形型ラーメンのモードや振動數がはつきり判り、計算も容易に行はれる。未だ實際の數値計算に入つてゐないが、將來は實際問題にまで入つて實船の例に就き説明される機會のあることを期待する。

#### 7. 釘の一設計法

正員 工學士 原田正道君

2個の木材を重ね合せて釘で固着し、その釘に剪斷力が働くやうな力を加へた時の2材の相對的なたまり量は力に比例するけれども、それには自ら或限界があつて、それを超えるとたまり量は漸く著しくなり始める。著者の行つた實驗的研究の結果、釘の孔に生ずる最大の面壓力が木材の面壓比例限に達した時に斯る固着部は比例限界を生ずるものであることが判つた。従つて次の様な順序で釘の設計法が出来る。即ち先づ材料試験に依つて木材の面壓比例限を求め、これより或適當な安全率を考へて許容面壓を定める。この安全率は1に近く且之より僅か乍ら大きくも小さくも採り得るものである。次に釘孔の最大面壓力をこの許容面壓に等しく置くことに依つて釘に許し得る安全荷重を計算する。茲に最大面壓力と安全荷重とは彈性理論に依つて關係づけられてゐるものである。

著者は木船の強度に關して今まで數回に亙り研究成果を發表してゐるが、今回の論文は木船の強度上最も大切な釘の問題を實驗と理論の兩面から検討したもので、木造船の重視される今日貴重な文獻を提供したものと云ふべきである。

#### 8. 補強板の應力解析

正員 工學士 林 毅君

著者は縱横に補強した補強板に就て純剪應場を假定し、應力分布計算法を考察し、特に弛緩法の適用法を研究して不規則な形状を持つ一般の場合にも適用し得る一解法を得た。而してこの方法に依つて一般直交異方性板、特に有孔帶

板の應力分布の近似解法が可能であることを示してゐる。

純剪断場理論は航空方面には廣く應用されてゐたが、造船方面に於ては目新しい問題であつて、餘り利用されてゐなかつた。それは船に於ては板は厚く又板自身が引張壓縮を受持つと考へて出發したため、このやうな考へ方に入つてゐなかつたのである。今後は造船方面にも取るべき理論と思はれる。

#### 9. 無肘板式船底縦通材に就て

正員 工學博士 吉識雅夫君  
准員 工學士 淺野順一君

インシャウツドの無肘板式構造に於ては、隔壁の下部に船の幅の方向に張られた二重張は單に縦強力連続性の觀點からのみ考慮されてゐる。本論文に於ては縦通材が船底からの水壓に因り曲げを受けるときにこの二重張が如何なる作用を及ぼすかを検討した。そして實際の場合には二重張と縦通材の重りを考へる必要があるが、縦通材は隔壁により直接支持されてゐるのではなく、二重張を介して支へられてゐる以上、二重張は曲げに依り相當の應力を受けるものと見るべきであり、單に縦強力からのみならず、この點に關しても設計上考慮を拂ふべきであると論じてゐる。

インシャウツドの無肘板式構造に就いて考案者は簡單に考へてゐたのであるが種々の問題が残されてゐる。著者はそれを深く突込んで研究し種々の指針を與へた貴重な論文である。

#### 10. 波型鋼板の強度に就て

准員 伏見榮喜君

船體の外板や隔壁板には横及び縦に桁を取付けて補強した平面板を用ゐるが、斯る構造に於ては防撓材相互及び末端の固着に多數の部材を要し従つて重量、工數も極めて大となる。然るにこの平面構造の代りに波型板を用ゐると波方向に對して防撓性が出來、従つて同方向の防撓材を省き得るので従來の平板構造に比し著しく部材數量工數等を減ずる。斯る理由で著者は波型板を船體構造に應用するときの設計上の資料

を得る目的で波型鋼板の實驗を行つた。その結果従來の平板構造の防撓材の一心距の  $I/y$  と波型板一心距の  $I/y$  を等値ならしむるやうに設計すれば工作上適當と見做される形狀の波型板を用ゐた構造は平板構造に比して重量約2割の輕減をなし得ることが判つた。

#### 11. A 及 TL 型戰時標準船に對する強度的検討と其の對策

正員 工學士 加藤 守君  
准員 工學士 岡部利正君

鋼船に對する構造規程を若干雜れて設計されてゐる戰時標準船中、A 及び TL 型に對して縦強度、外板、接手及び船底構造の點から検討した結果、TL 船に對しては全く補強を施す必要がないことが判つた。A 型船に對しては縦強度の點からすればその截面抵抗率は上甲板に對しては鋼船構造規程に定められた値を保有するが、船底部では規程による値とは相當の差があり、空輸入港時のホッキング状態に於ては比較的大なる船底壓縮應力を生ずる可能性があるが、縦桁間に設けられてある防撓材を考慮に入れると挫屈に對しても猶堪へ得るものと判斷される。但し船側外板下部に對しては補強のため防撓材の新設を適當と認める。外板接手に對しては幾分弱體の感あるため、外板ブロック接手をなす緊張板上下部に充分な二重底を施す必要がある。船底は規程では二重底となすべき所を標準船は單底としてゐるが、その構造部材の寸度は二重底の實體肋板及び組立肋板の大略平均の慣性能率を有する肋板となるやう決定されてゐて、計算の結果は兩者略同等強度を有するものと判斷する。即ち A 型船に於ても外板接手の補強及び船側外板下部の防撓材新設の程度で先づ差支へないものと考へる。

以上が本論文の要點であるが、時局の關係から材料節約、工事簡易化に逼られ、それに対応するやうに設計された戰時標準船がどんな實情にあるかを検討する上に於て、絕對に正しいかどうかは別として、今までの規則と比較してかうなるといふことを調べ、一方實際の運航に就て調べるといふことは造船の進歩の上で非常に有益

なことで、この意味に於て本論文は有益な資料を提供されたものといふべきである。

## 12. 戦後標準貨物船用機関に就て 正員 工學士 妹尾三郎君

著者は本論文に於て戦後の標準貨物船として遠洋用總噸數 6,000 噸、近海用 3,000 噸、沿岸用 1,000 噸の 3 種を選んで經濟的機關の研究を行つた結果に就て述べてゐる。汽罐には水管罐を使用することが絶對に有利であり、補機は電化することによつて汽罐給水に油や酸素の混入する機會を無くし、且熱効率を高め得る。6,000 噸型 4,000 馬力の機關に於ては従來の設計に比べて機關部重量 19%、燃料消費量 16% の減となり、価格は變りない。1000 馬力程度の機關には従來圓罐と往復式機關とが用ひられて來たが、これも水管罐とタービンを使用することに依つて 3% の機關部重量と 16% の燃料節約が出来る。尙 6000 噸型としてはディーゼル機關裝備の案と米國船リパチー型の改造も研究した。尙著者はこの講演は講演といふよりも問題の提案であると述べてゐる。

戦時中の戦艦船の機關に就ては種々の苦い經驗を嘗めてゐるが、戦後は戦時中の惡條件に拘束されることなく相當に耐久性のあるものを考究すべきである。この時に當り新しい機關を設計し、従來のものと比較されたことは關係者に取り大きな示唆である。

## 13. 辨無往復働汽機に就て 正員 山根繁昌君

従來の 3 段膨脹蒸氣機關に於ては各汽管共蒸氣溜竝に給廢汽弁を有するが、このため各汽管内の蒸氣の膨脹は獨立して行はれ、従つて膨脹終りの蒸氣壓力と廢汽溜との間には相當の壓力差を生ずる。そのため効率は低下する。3 段膨脹汽機に於ける各曲肢間の角度は  $120^\circ$  にするのが普通であるが、この關係位置よりして吸鑿を以て給廢汽を司らしめる事が出来る。即ち高壓汽管の蒸氣入口側に蒸氣弁を裝備するのみで各汽管間には蒸氣溜竝に滑弁を廢止し、双方を蒸氣導管を以て直結するのみで吸鑿を以て給排

汽を司らしめることが出来る。これに依つて蒸氣溜を裝備することによつて起る壓力の低下を防止して機械的出力を増加し、更に高溫部を排汽で冷却することによつて生ずる熱損失を防止し得る。其の他機構の簡單化に伴ふ機械効率の増加、故障の減少、重量並に製作費の輕減等の利點が考へられる。

以上が本論文の概要であるが、従來各シリンダに於ける蒸氣の分配には必ず弁を用ひ、シリンダ間には太い蒸氣溜管を置くやうに決つてゐる如く考へられてゐるが、本論文はこの舊套を脱した面白い着眼である。尙機械も製作中とのことで、その成績の發表を待つ次第である。

## 技術委員會の解散と新研究委員會 の發足

造船協會技術委員會は協會獨自の立場に於て戦時中特に急速解決を要すべき船舶科學技術に關する問題を選定してその研究を行ひ、時局即應の活躍を試みるべく發足したものであつて、昭和 17 年 6 月の定期評議員會に於て其の設立が確定せられたものである。爾來 3 つの部會とそれに屬する 12 の研究委員會とを設けて研究を繼續し來つたものであつて、其の最後の結論に達したものは勿論、中間結論と雖解決し得た事項は夫々當局に進言し、時局に寄與せし處少くなかつたのである。然し乍ら終戦後の今日に於ては更に繼續を可とすべき研究項目もあるが、その多くはこれを中止して差支へないので、繼續すべきものはこれを別箇の形式に於て實施することとし、本年 5 月 13 日開催の技術委員會主査會に於て一應解散することを決議し、6 月 12 日開催の定期評議員會に於てその解散を正式に決定した。

其の間本委員會に於て實施し來つた事業及び其の業績に就ては不日委員長から報告がある筈であるから何れ雜誌誌上で發表されることと思ふが、今その研究項目のみを列擧すると次の通りである。

### 第 1 部會 造船造機基礎科學技術關係

- 第 1 研究委員會 電氣熔接使用に關する研究
- 第 2 研究委員會 構造物疲勞試驗機の計畫

- 第3研究委員会 遠隔管制應力測定装置の研究  
 第4研究委員会 造船教育整備の研究  
 第2部會造船設計及び工作關係  
 第5研究委員会 戰時標準船に関する研究  
 第6研究委員会 船舶の電気に関する研究  
 第7研究委員会 荷役設備の研究  
 第8研究委員会 半自動溶接法の研究  
 第3部會 造機設計及び工作關係  
 第9研究委員会 非黃銅推進器の研究  
 第10研究委員会 給水の油分離の研究  
 第11研究委員会 ゴム使用の研究  
 第12研究委員会 代用材料規格の制定

技術委員會は上述の如く解散せられたが、本協會としては今後も引續きその技術部門の常置機關として研究委員會を設置することは使命達成上是非必要なので目下如何なる種類のものを設けるかに就て考慮中であるが、先般開催された技術委員會主査會では大體次の様な各種委員會を設けるのを適當と考へるといふ意見が出た。即ち、

- (イ) 電気溶接使用に関する委員會 (舊第1研究委員會の繼續)  
 (ロ) 漁船及び小型船に関する委員會  
 (ハ) 工作法に関する委員會  
 (ニ) 木船に関する委員會

この他に造船協會としては従來から水槽委員會があつて試験水槽技術の向上に資して來たが、これは今後も研究委員會の1つとして繼續されること勿論である。

水槽委員會は別として、新設せらるべき研究委員會は協會の經費の見透しをつけた上で實施可能のものから逐次發足する筈で目下その準備をなしつつある。

#### 船舶工學便覽刊行その後の狀況

昭和14年11月9日に船舶工學便覽編纂委員會第1回委員總會を開いて編纂要綱案の審議を開始して以來、委員長以下幹事、委員及び執筆者の非常な努力によつて原稿は全部完成し、その査讀も終つて感々出版に取掛らうとし、岩波書店との間に出版契約の取極めの相談中戰災

のため印刷能力を失ひ、確保してゐた用紙も焼失してしまつたため遂に一時期出版を見合わせるより他なかつた。幸ひ原稿は山梨縣下に疎開してあつたため焼失を免かれ、1頁も損失することなく完全に残つたことはこの上もない仕合せであつた。最近印刷能力も漸次復活して來たので、早速出版に取掛る積りで先般來數次に互り幹事會を開いてその手順を進めてゐるが、岩波書店としては、

(イ) 現下の資材、印刷能力及び經濟各方面の狀況から見て早急に出版することは不可能である。

(ロ) 然し乍ら印刷能力は漸次回復するものとして、諸般の事情が許し次第印刷に着手し得るやう原稿の整理をなし置くを可とする。

(ハ) 用紙が悪いため1冊に纏めることは困難な上に、尨大となつて使用上にも不便だから5冊位に分けては如何、即ち基本210頁を第1巻、造船580頁を第2,3巻、造機250頁を第4巻、雜及び索引270頁を第5巻とする。

(ニ) 出來上りの大き四六判を廢してA5判とする。

(ホ) 附圖が折角淨書してあり乍ら、線が細過ぎ不鮮明になる恐れのあるものがあるから、それ等は畫直しを必要とする。

等の意見があつた。幹事會としては大體この意見を用ひて5分冊に分けて出版することにし、早速附圖の整理に取掛つた。只今の見込みでは8月中には整理を終り、9月に入れば何時でも印刷し得る機萬般の準備を整へる積りである。印刷の都合で出來易い篇から出版することにし、順調にゆけば年内には第1冊を出せる見込みである。

#### 役員會決議事項摘録

4月8日臨時評議員會及び定例理事會

- (1) 入會申込者3名の入會を承認した。  
 (2) 春季講演會次第書原案を承認し會員へ通知方を決定した。  
 (3) 最近の經濟事情を勘考して立案された通年豫算案を前回評議員會に引續き審議した。然るに討議の結果數字的に確定するには尙早と

認めざるを得ない。即ち特に造船所の接收、諸種の原因による会員数の減少が見透しのつかない限り収入支出共算定困難である。依て今暫く原案の採否を保留し、再審議の時期到来を待つこととなつた。

(4) 雑費第 267 號印刷部数は現在住所不明会員の少からざる實狀に鑑み 3,000 部とすることに決定した。

(5) 事務長として適當な人を迎へることは事業を活潑に再出發させるには縦令人件費の増加を同じも是非共必要と認め之が人選は理事會に一任された。

#### 5 月 27 日定期理事會

- (1) 入會申込者 7 名の入會を承認した。
- (2) 退會申出者 3 名の退會を承認した。
- (3) 今期間に報告のあつた死亡會員は 6 名である。

(4) 定期役員會は今後第 4 水曜日午後 2 時より開催、會場は當分の間東大第一工學部船舶工學科會議室を借用のことに決せられた。

(5) 明年は本協會創立 50 周年に當るので記念講演會其の他の事業の計畫に着手することに決せられた。

(6) 事務長任用に因り、木下、佐藤兩會務委員は退任のことに決せられた。

(7) 昭和 20 年度分の未徵收會費は調査の徹底を期し難きため不徵集のことに決せられた。

(8) 本年度收支豫算は最近の物價情勢から推察してその變更を餘儀なくされたので、上半期の收支決算と下半期の實行豫算とを併せたものを以て第 49 期年度收支豫算とすることとし、次回評議員會に於て承認の上は臨時總會に附議し正式決定方を取計ふことに決せられた。

(9) 前數回の役員會に於て審議を重ねた通年豫算案は、會費等値上の基礎説明資料として適當に修正することに止めることとし、改めて理事會案を作製し次回評議員會に於て承認の上は細則中一部改正の爲臨時總會を開催のことに決せられた。

(10) 今後の我造船界の動向として木造船及び漁船興隆の算大なるものがあるので、新規に

この方面に團體員としての入會方を勧誘することに決せられた。

(11) 會報用紙節約のため巻頭掲載の例となつてゐる定款細則の全文並に本協會創立以來の講演論文題目を省略することに決せられた。

(12) 4 月 9 日附を以て事務長に出淵 巽君を任用することとなつた旨報告があつた。

(13) 技術委員會に於ては過日主査會を開催し同委員會の解散至當を決議した旨報告があつた。

#### 6 月 12 日定期評議員會

(1) 5 月 27 日定期理事會で決議處理された事項を一括追認された。

(2) 入會申込者 63 名の入會を承認した。

(3) 退會申出者 3 名に對し一應懇意方を照會することに決せられた。

(4) 死亡會員 3 名の報告があつた。

(5) 現住所判明の准員中 116 名に對し事務取扱内規第 1 章會員資格銜標準第 1 條及び第 2 條の規定に據り正員又は協同員に資格變更方推薦狀を發し承諾を求むることに決せられた。

(6) 技術委員會の解散は既に前數回の役員會に於て委員會整備の觀點から審議の對象となつてゐたが、同委員會に於ても過般主査會を開催し、此際事業打切を至當と認め、役員會の意向と全く一致したので同委員會の解散を容認した。

(7) 本月中に臨時總會を開催し、第 49 期年度收支豫算變更並に會費等値上に關聯する定款細則中一部改正を附議することとなり、之等諸件に關する原案に對し適當の修正を加へて之を可決した。

#### 第 49 期年度臨時總會議事摘録

6 月 29 日(土)午後 1 時から東京帝國大學第一工學部船舶工學科第 32 號講義室に於て臨時總會を開催し次の諸議案が附議せられ何れも異議なく原案通り可決せられた。

第 1 號議案 第 49 期年度經常部收支豫算變更の件

第 2 號議案 定款及細則中一部改正の件

(一) 入會金及會費等増額の件

(二) 協同員資格廢止の件

(三) 改正定款及細則施行に關する件

以上議案の詳細な説明は後日會報を以て報告される筈であるが、今その要點を略記すると次の通りである。

第1號議案は本期經常部收支豫算を上半期のみに就て見てもその決算との間に著しい開きがあり、現在の物價情勢から見て下半期豫算は當然變更されなければならないので、上半期決算額と下半期實行豫算額とを併せて本年度豫算案とし附議したものである。

第2號議案の内容は、本協會の根本使命たる會報雜誌の發行其の他の事業を遂行するためには年次歳出入の均衡を保持する上に於て已むを得ざる處置として入會金及び會費その他を増額しなければならない。而してその額は次表の通りとしたい。又この際協同員を廢して正員とする、これ等の變更に伴つて定款及び細則を改正する必要がある。尙この改正は7月1日から施行するといふのである。

新舊會費等比較表(協同員を除く)

	新	舊
入會金	個人會員 10圓	3圓
	團體員 50圓	10圓
會費	正員 60圓	12圓
	准員 40圓	8圓
	學生員 24圓	4圓
	團體員1級 3,000圓	300圓
	2級 2,000圓	200圓
	3級 1,000圓	100圓
	4級 300圓	30圓
終身會員	750圓	150圓

賛成員 3,000圓以上の 300圓以上の  
(一時) 金員又は物件 金員又は物件

雜 錄

4月以後の諸會合

- 4月8日月 臨時評議員會
- 5月5日月 春季講演會
- 5月13日月 技術委員會主査會
- 5月27日月 定例理事會
- 6月3日月 便覽幹事會

- 6月4日 火 編輯委員會
- 6月10日月 便覽幹事會
- 6月12日 水 定期評議員會
- 6月21日 金 便覽幹事會
- 6月24日月 水權委員會
- 6月29日 土 臨時總會

雜誌第267, 268號記事預告

第267號

- 進水用コロの摩擦係數に就て 遠山 光一君
- 水流方向及び流速計測用ビトー管に關する一考察 鬼頭 史城君
- 水中衝擊に關する理論 鬼頭 史城君
- 重複荷重下の金屬の疲勞 木原 博君
- 内燃汽船の軸系振動の簡易化に就て 長野 利平君
- 船の浮沈に要する時間に就て 田宮 眞君
- 全熔接船に就て 柴田 義孝君

第268號

- 船用推進器翼の強度に關する實驗的研究 鬼頭 史城君
- 一本足進水に就て 村上 外雄君
- 齒車の強度計算法(第1回) 奥田 克巳君
- 技術委員會第1研究委員會第1回報告拔萃
- 技術委員會第8研究委員會第1回報告拔萃

編輯連絡員に就て

編輯委員會の進達に基づき雜誌內容の充實を圖り益々其の使命を推進する爲にその一端として各地主要造船所に編輯連絡員(假稱)をお願いし、現場に於ける設計若くは施工等の紹介記事を努めて収録し、研究施設から提供せられる論說に配することになった。既に下記諸造船所からは承諾の旨回答を得、夫々連絡員の氏名通知を得た。

- 三井造船玉野造船所 水野 時雄君
- 藤永田造船所 遠山 嘉雄君
- 三保造船所 小澤 雅男君
- 船舶試驗所大阪支所 土川 義朝君
- 日本鋼管淺野船渠 伊藤 正誼君
- 浦賀船渠浦賀造船所 平田 英三君



函館船渠	(山崎 良二君 民谷喜藤助君
三菱広島造船所	谷口 信吉君
播磨造船所	(多田 正文君 杉山 兼章君
三菱横濱造船所	(成島 秀君 秀島 義人君
三菱神戸造船所	白井 秀雄君
三菱長崎造船所	(岩崎 誠一君 津田 鐵彌君
川崎重工業艦船工場	尾崎辰之助君

上記の他尙次の各造船所へも夫々委嘱方照會  
中なので追て承諾を得るものと考へてゐる。  
市川造船所 旭造船所 林兼造船  
茅ヶ崎製作所 三菱重工下關造船所

#### 會費納入に就きお願ひ

先般昭和 21 年度上半期分會費を御納め願ふ  
やう手配致しました。今後會誌の發刊、講演會  
の開催又は委員會事業等諸般の事業の活發なる  
再出發を企圖してをりますが、現在の物價情勢  
から推察しますとこれが實施には尠からざる支

出を豫想せられますので此の際漏れなく至急御  
拂込み下さるやうお願ひします。

#### 事務室より

丸の内仲通りの舊事務所が昨年 3 月 10 日の  
空襲により一物も残さず丸焼けになつて以來今  
日迄引續き東京帝大第一工學部船舶工學科講師  
室を無料拜借して執務してゐます。縦 6.5 m,  
横 2.68 m, 面積 17.24 m<sup>2</sup> といふ長つ細い狭い  
部屋に机を 2 脚拜借し、事務長以下總計 5 人が  
机半分乃至 3 分の 1 占領して懸命に執務してゐ  
ます。來客があると事務員の 1 人は立つて仕事  
し、その椅子を客に勧めると言つた窮屈さで  
す。それでも事務には支障ありません。こゝも  
船舶教室主任からそれとなく軟かな追立てを喰  
つてゐるのですが出て行く先もなく、あつても  
べら棒に高い家賃では豫算が承知せず、今少し  
強硬な追立てがあるまでは居居る積りでゐま  
す。目下仕事の分擔は、事務長出淵、庶務岡  
柳、會計荒木、編輯若林、庶務補助坪井となつ  
てゐます。大學にお出の節は是非お立寄り下さ  
つて御激勵の程をお願ひします。

昭和 21 年 8 月 10 日 印刷

昭和 21 年 8 月 15 日 發行

編輯兼 發行者	東京都世田谷區代田 2 丁目 784 出 淵 一 巽
印刷者	東京都瀧野川區上中里町 153 倉 澤 直 男
印刷所	東京都瀧野川區上中里町 153 會社 双 文 社
發行所	東京帝國大學第一工學部船舶工學科内 社團 法 人 造 船 協 會